



社会福祉法人 聖隷福祉事業団
総合病院 聖隷三方原病院
聖隷おおぞら療育センター

〒433-8558
静岡県浜松市北区三方原町3453
TEL 053-437-1467

発行責任者 荻野和功
編集者 横地健治

2019年11月1日

何を聴くか

横地 健治

重症心身障害児者では、聴覚が視覚より優位です(健常者は視覚優位です)。それでは、その人に聴いてもらいたい音や声をどう提示したらいいかを以前本通信で述べました。今回はその人に聴いてもらう価値のある音や声は何かについて考えてみます。

健常者では、聴くモノの大半は他者の発する言語です。言語は自分と他者が意味を共有するためのものです(厳密に同じ意味ではありません)。よって、言語については、聴いたモノの意味は明解です。言語以外の聴いたモノの多くは、何がどうした時の音として言語化して認識されるのがふつうです。例えば、ワンワンと聞こえたものは「犬の鳴き声」とします。これは、健常者がモノを見た場合、何々を見たとして、見たモノを言語化すると同じです。この過程では、見て区分けしたモノに対し聴覚言語のラベルを貼っています。実は、モノの名称化の過程では、視覚による区分け(例えば、「犬」)が相当関与しており、聴覚音源の認識にはその人の十分な視

覚経験が不可欠です。そうして、聞こえたモノに対して、同一言語圏内では共通認識を持つことができず(ただし、かなり曖昧ですが)。こうして、時と場所を越えて、特定の聴覚音源(例えば、犬の鳴き声)を同一化します。その結果、主観的聴覚感覚の元となるモノを個別的実在と見なします(例えば、聴く人がいなくても、「犬の鳴き声」が存在する)。

ところで、健常者では言語化せずに意識的に聴いているモノもあります(これに対し、視覚では、言語化しないモノの多くは無意識に見えています)。例えば、風が風鈴のような音を鳴らしたら、ヒトは聴いて心地よさを感じるはずですが、そうして、ヒトはこうした音を発する道具(楽器)を創りました。そして、その音を人為的に複雑な様式で発生させるようになりました。それが「音楽」です。そこには、言語を介しない意味世界があります。祭りの囃子は心浮き立つモノです。戦いの場では勇気を鼓舞する鳴りモノがあります。これらの実体はリズム

ム・メロディといったモノです。ところが、こうしたモノの受け取り方は人により相当異なります(よって、音楽の好みは民族・世代・年齢層によつて様々です)。また、このモノの区分けには視覚は関与しません(前述の「犬」のような)。そのため、リズム・メロディといったモノを他者と共通認識するラベルはありません。強いて付けるとすれば、多くの人を何々の気持ちにさせるようなモノと言うしかありません。

それでは、有意な言語理解のない乳児はどんな聴覚世界に住んでいて、音や声はどう区分けしているか考えてみます。乳児期では、聴いた音韻列を分解し、それを意味と対応させる膨大な試行錯誤を行っています。この作業が始まったばかりの乳児期早期では、母の声と家庭の社会音は、自分との関係付けを元にして聞き分けているでしょう。それ以外は意味づけできず、聞き流しているのでしょう。ただし、一部は漠然と記録されていて、また同じ音を聞いたら、以前それを聞いた状況を思い起こし、共通点を探るようにするのでしょう。これを繰り返して、何がどんな音を発し、どう自分と関わるかを学

習していくのでしょうか。こうした聴覚学習過程の初期では、見たモノの区分けも緒に就いたばかりと思えます(例えば、「犬」をモノとして区分けできない)。そこはどんな世界でしょうか。絶海の孤島にひとり流れ着いたとします。そこには、今まで自分が見たことがあるモノは何もない。何か聞こえてくる音が、今まで聞いたことがある音や声ではない。そこには先に流れ着いた人が一人いた。この人は、この島での生き方がある程度わかっているようだが、言葉は通じない。なぜかその人は自分を助けることに労をいとわない。こんな世界では、自分の生存に関係した音や声に聴き耳を立てるでしょう。食用にする生き物の発する音声、外敵の発する音、風や雨、水の流れなどの音です。それよりも、言葉の通じないもうひとりの人の挙動や意向を示す音や声にはもっと聴き耳を立てるでしょう。それは唯一の保護者だからです。また、その人からこの島のことを学ばねばなりません。その人の言葉を解読するために、その人がどんな時どんな言葉を発するかを聞き逃さないようにはしているはずですが。

これらは、乳児にそのまま